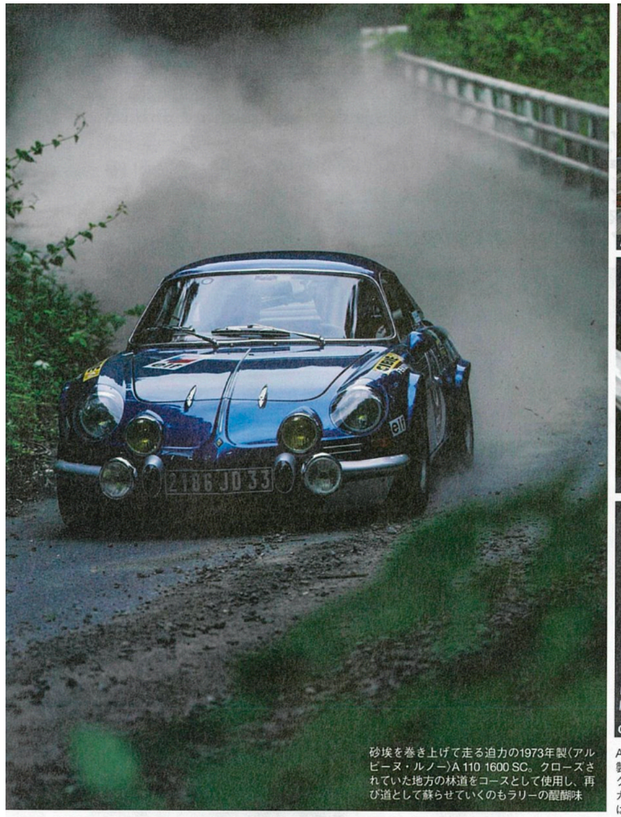

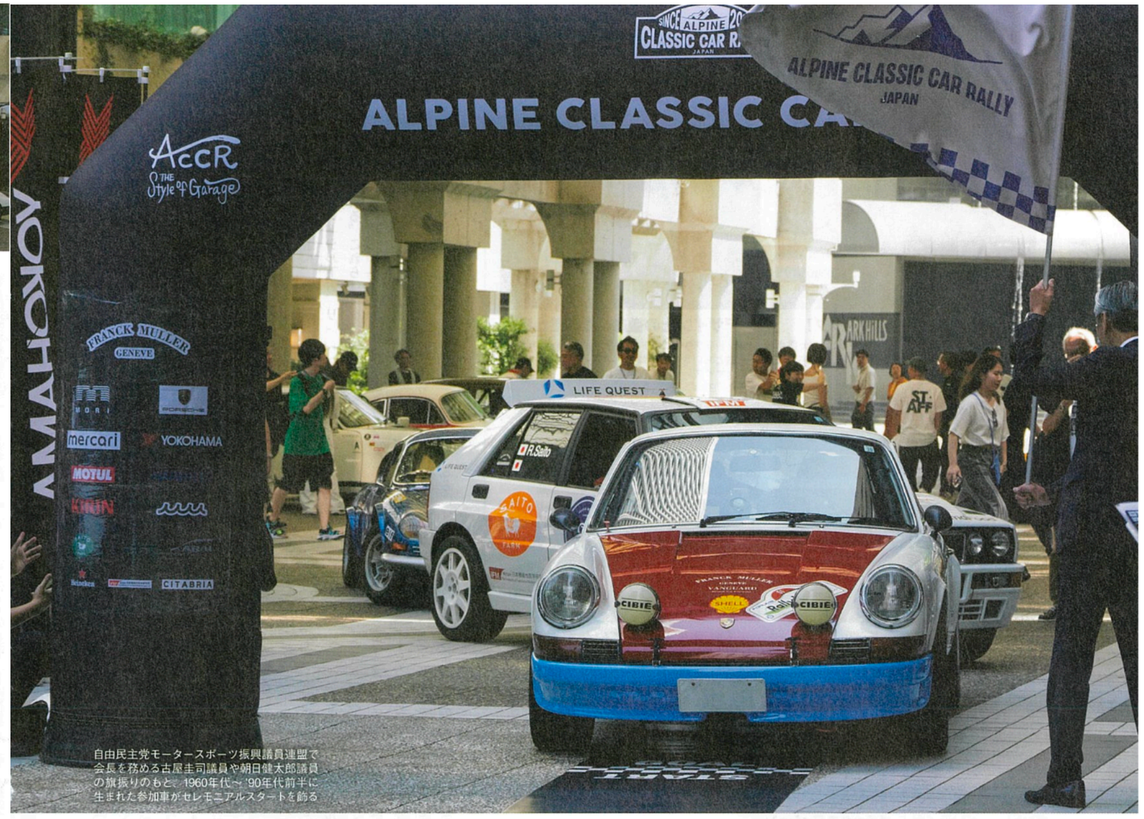

自由民主党モータースポーツ振興議員連盟で会長を務める古屋圭司議員や朝日健太郎議員の旗振りのもと、1960年代～'90年代前半に生まれた参加車がセレモニアルスタートを飾る

砂埃を巻き上げて走る迫力の1973年製〈アルピーヌ・ルノー〉A 110 1600 SC。クローズされていた地方の林道をコースとして使用し、再び道として蘇らせていくのもラリーの醍醐味

A：1960～'80年代製の〈ポルシェ〉や'70年代製の〈トヨタ〉に〈アルファ ロメオ〉、'80年代製の〈フェラーリ〉、〈ランチア〉など旧車好きにはたまらないメーカーのクルマが六本木アークヒルズに集合　B："カラヤン広場"に集まったドライバーたちは自身でナンバースティカーを貼っていく。参戦したレースのナンバーに重ねる歴戦のドライバーも　C：出走前には古屋圭司議員や朝日健太郎議員、スポーツ庁の室伏広治長官のスピーチも行われた

ヒストリックカーの継承が世の中をもっと面白くする！

遊びを知る男たちが夢中になる クラシックカーラリーの世界！

"地方と都市を繋ぐラリーツーリズム"をテーマに、2012年から開催されているACCR。クラシックカー好きなら憧れてやまない歴史ある名車を走らせ、そのタイムを競うレースだ。どことなく"格好よさ"をまとう大人たちが集まり、夢中になっている理由をスタートの地、六本木で探る！

写真=数内 勞　構成&文=池上隆太　photo : Tsutomu Yabuuchi　composition&text : Ryuta Ikegami（AM5:00）

都会の真ん中、六本木と赤坂をまたぐアークヒルズに品格漂うクラシックカーが並ぶ圧巻の光景。メインスポンサー〈フランク ミュラー〉の旗やオブジェが飾られる会場で優雅に朝食を終えると、レースのスタートを迎える。

ACCR（アルペンクラシックカーラリー）は、そんなラグジュアリーな雰囲気を持つイベントではあるが、"本物"のラリー。主催者である入川ひでとさんは「モータースポーツの中でも特別なカテゴリーですね。手作業メインで作られた古きよき時代を象徴するクルマでレースをするわけです。整備に手間暇はかかりますが、時代的にそのクルマが果たした役割みたいなものを背負いながら、次の世代へモノづくりのよさや、自分たちのライフスタイルを伝承したいと思っています」と話す。50、60年という歴史のあるクルマをただ所有するのではなく、動態保存し、公式のレースに出られる状態で若い世代に繋いでいくということだ。

ラリーといえば、公道を走るわけだが、「ただ、"公道"といってしまうと、誤解があるかもしれません。"スペシャルステージ"というのですが、私たちは占有許可をとったうえで走っています」

現在は使われていないような地方の山道などを立木や落ち葉の掃除からはじめてコースに設定するのだという。

「そうすることで、使われなくなった道が、また地元の人に使ってもらえるようになるというメリットもあるんですよ」

地域や文化への貢献も高いため、経産省や国交省、スポーツ庁の後援も受ける。

「ラリーを本気で楽しみながら、そういった趣旨に賛同してくれるドライバーが集まってくれているのが嬉しいですね」

ACCRが開催されることで生まれる効果や思いに共感して集まった、余裕と教養を持ち合わせた大人たちだからこそ、輝いて見えるのも当然というわけだ。

DRIVER'S MESSAGE

河合寿也さん［1973年製 トヨタ セリカ TA22］

人生の中で1番の楽しみ。これがあるから仕事も頑張れる。

年間限られた回数のラリーに向けて、日々イメージトレーニングをしています。ひとつレースが終わると、すぐに次へ向けて戦略を考えていますね。子供の頃からクルマが大好きで、その延長にレースがありました。ラリーはみなさんとタイムを競うのはもちろんなのですが、1台ずつスタートするので、自分との勝負という側面も強いです。周回するサーキットとは異なり、ラリーは毎回開催地やコースが違いますし、路面状況も整っているとは限りません。常に100パーセント集中していなければいけない状況です。その集中力というか、自分が現実離れする瞬間がやみつきになってしまうんですよ。たくさんの方にオススメしたいですね。

ヨーロッパのようなクルマ文化を日本にも定着させていきたい。

ラリーは普段乗っているクルマでそのまま競技ができるモータースポーツ。とても身近で、そこで培った技術は一般道の安全運転にも繋がります。ヨーロッパではメジャーですが、日本では今までなかなか浸透しなかった文化ですね。珍しいクルマを見せたり、披露するような趣味嗜向の世界ではなくて、そのクルマを最後まで走らせてあげる、性能を引き出してあげるというのが、クルマに対しての愛情だと思っていて。そのシーンを日本にも定着させたいと思い、初回から参加をしています。ACCRを続けることで、日本のクルマ文化が少しでも変わり、多くの人が「クルマで遊ぼう」という気持ちになってくれたら嬉しいですね。

新井敏弘さん［1978年製 ポルシェ 911］

入川ひでとさん［1963年製 ポルシェ356B］

モータースポーツの普及で地域や世代を繋ぐことを目指して。

世界基準のドライビング技術を持った人が集まっていますし、ハンスをつけて、難燃性のレーシングスーツを身につけて挑むわけですから、競技として真剣に取り組んでいます。いかにタイムを縮められるかは常に考えていることですね。それと同時にACCRは日本のモータースポーツ文化の普及も目的にしています。普段ゲーム機の前で遊んでいる子供たちにも、自分の父親や祖父世代が華やかなクルマで楽しそうに遊んでいる様子を見てほしいと思うんですね。ここ2、3年のうちには"モータースポーツが日本の歴史や文化を紹介する"というコンセプトで、日本全国をまわる"ツアージャパン"として展開していくつもりです。